

第15回 鴨叡会・生命分子化学科セミナー

《講師》

富永 隆一 先生（天野エンザイム(株)）

《演題》

酵素科学と酵素ビジネスの歴史について

《日時》 11月20日(水)午後4時10分から

《場所》 京都府立大学附属図書館3階視聴覚室

《講演内容》

酵素が蛋白質であることを立証した1926年のSumnerのナタ豆Ureaseの結晶化の研究以来酵素科学は周辺の科学の進展に伴って広がり且つ深まってまいりました。酵素に関わる学問も「有機化学」から「生化学」、更には「分子生物学」という展開を見せます。

一方、日本が誇るBiotechnologyの父、高峰讓吉博士は学問の世界ではEmil Fisherが酵素の触媒作用について「鍵と鍵穴」という理論を唱えた頃には既にTakadiastaseという商品を世に送り出しました。第2次大戦後には様々な酵素の利用開発が行われてきました。そのような酵素に関わる歴史を、「酵素科学と周辺科学の進展」の一覧表で俯瞰しながら、また、酵素資料室に収集した資料を参照しながら振り返ってみたいと思います。

《連絡先》

織田 昌幸（生命物理化学研究室）

E-mail; oda@kpu.ac.jp, Phone; 075-703-5673